

## 優秀賞

「人を気づかう心」

登米市立中田中学校 一年 佐藤 彩乃 さとう あやの

私には、曾祖母がいる。曾祖母は、いつも元気だ。

私は、いつも茶の間で勉強をしている。茶の間には、曾祖母もいる。勉強していると、曾祖母に、

「鉛筆もつと上持ちなさい。」

と言われた。私は、鉛筆の持ち方がおかしいとは思わなかった。曾祖母の言うことを聞かなかった。だから、曾祖母と同じことを何回も何回も言われた。私がしぶしぶ直すと次は、

「電気もつと明るくしなさい。」

「前髪ピンでとめなさい。」

と何度も言われた。それが毎日続いた。私は正直、そんな口うるさい曾祖母がイヤだった。

ある日、曾祖母は体調を崩し、入院することになった。私は、曾祖母を心配する気持ちもあったが、口うるさい曾祖母がいなくて少しうれしい気持ちもあった。

私は、曾祖母がいない静かな茶の間で勉強をした。いつもの何倍も静かでも集中できた。そんな日が何日か続き、その日もいつも通り勉強していた。しかし、途中で集中でき

なくなった。それは、いつも私のことを気にかけて、口うるさく言ってくれる曾祖母がいなかったからだ。私は急にさびしくなった。

曾祖母のいる病院にお見舞いに行った。いつもの元気な曾祖母がいた。私は、曾祖母が元気で少し安心した。病室についてすぐ曾祖母に、

「ご飯食べたの。」

と言われた。前の私だったらうるさいと思っていただけ、その時は、少し安心した。曾祖母と話している時間はあつという間だった。帰る時、曾祖母は私の顔を見て言った。

「気をつけて帰るんだよ。」

曾祖母は、自分が入院しているのに私たちを気にかけてくれている。私は、こんなにも私たちのことを思っていることに感謝し、そんな曾祖母を尊敬した。

曾祖母の退院の日、私はワクワクしながら学校から家に帰った。茶の間に入ると、曾祖母がいた。曾祖母が、

「おかえりなさい。」

と私を迎えてくれた。私は、曾祖母のいる茶の間で早く勉強したくなった。勉強道具を広げ、久しぶりに曾祖母の前で勉強した。すると、いつものように曾祖母が口うるさく注意してきた。でも、その日はその言葉を聞いてやる気があふれ、とても勉強がはかどった。

私が曾祖母から学んだことは、人を気づかう心だ。曾祖母は、私だけでなく家族や親せきにも声をかけていた。自分の体調が悪いのに、いつもと同じように他人のことも心配していた。私は、自分だったらそんなことはできないと思った。もし、曾祖母の立場だったら、自分のことで一杯になってしまおうと思う。だから、私は曾祖母を見習おうと思った。自分がどんなに辛く苦しいときでも、他人のことを思い行動したい。そうすれば、思いやりがあり強い心を持った人になれると思う。私は曾祖母からこんなに大切なことを学ぶことができた。私も、曾祖母のように、人を気づかうことができ、強い心を持った人になりたい。私にとって曾祖母は、尊敬する存在であり、お手本だ。私は、曾祖母のようになれるように、日々の努力を忘れず、他人のことを思い行動していきたい。

これから、私は自分が辛いときこそ、周りの人のことを考え手助けしてあげようと思う。そうすれば、自分の力になっていくと思うから。

曾祖母は、もうすぐ九十七歳だ。私は、もっともっと長生きをして、私たちにたくさんのことを教えてほしいと思う。